出エジプト記36－37章 「御霊に満たされた職人たち」

1A 主への献げ物 36:1－7

1B 心に知恵のある者 1－2

2B 有り余る奉納物 3－7

2A 幕と板 36:8－38

1B 幕 8－19

2B 板 20－34

3B 垂れ幕 35－37

3A 祭具 37

1B 箱と蓋 1－9

2B 臨在の机 10－16

3B 燭台 17－24

4B 香壇 25－29

本文

出エジプト記 36 章を開いてください。私たちは、主が造るように命じられた幕屋を、実際に取りかかる職人たちの姿を見ていくことになります。

1A 主への献げ物 36:1－7

1B 心に知恵のある者 1－2

1 ベツァルエルとオホリアブ、および、聖所の奉仕のあらゆる仕事をする知恵と英知を【主】に授けられた、心に知恵ある者はみな、すべて【主】が命じられたとおりに仕事をしなければならない。」
2 モーセは、ベツァルエルとオホリアブ、および【主】が心に知恵を授けられた、すべて心に知恵ある者、またその仕事をするために進み出ようと、心を動かされた者をみな呼び寄せた。

主がシナイ山で、モーセに対して造りないと命じられた幕屋そして祭司の装束を、ようやくここで実行に移すところです。ベツァルエルは、ユダ族の人で、主に幕屋の中の用具を造ります。そして、オホリアブはダン族の人で他にも知恵のある人々に指導して、幕や板などを造らせます。

そして 36 章から実に 40 章まで、延々と、すでに主が語られた幕屋と祭司の装束が繰り返されています。反復して話しているのはなぜだろうと思いますが、主は、それだけ人々の奉仕を喜んでおられる、その働きをすべて目に留められていることを教えているのだと思います。私たちは、常に心に抱いているのは、「自分のしていることへの報い」です。「今、自分が行っていることが、果たして価値のあることなのか？」自分のしていることを推し量る存在を求めています。人から認め

られることを私たちは求めますが、それ以上に、信仰者にとっては主ご自身から認められることを求めるでしょう。ベツァルエルとオホリアブという奉仕者を通して、主に対する奉仕を知っていきたいと思います。

まず彼らの働きについて、すでに前回読んだ、35 章の最後の部分を読みます。30-31 節です。「30 モーセはイスラエルの子らに言った。「見よ。【主】は、ユダ部族の、フルの子ウリの子ベツァルエルを名指して召し、31 彼に、知恵と英知と知識とあらゆる仕事において、神の霊を満たされた。」彼らは、もともと能力のあった人々ではありましたが、神の霊に満たされたことによって神の仕事を行うことができました。

私たちには、生来の能力を持った人々がたくさんいます。理系に得意の人もいますし、また芸術肌の人もいます。こうした能力は神から来ています。そして私たちが教会の奉仕、また賜物という言葉を聞くときに、果たしてこれらの能力が発揮されることなのか？と考えます。歌の上手な人がそのまま賛美の奉仕をすることなのか？また会計のできる人が、会計の奉仕をすることなのか？そういう場合も多くあります。けれども、信仰の世界では「神の御霊」が介入されて、これまで自分が行ってきた働き以上の、大きな事を成し遂げることになります。

ダニエルという人はユダの国の王族にいました。そして彼の他に三人の友人がいましたが、バビロンが一部の王族と貴族の一部を自分の国に捕え移しました。ダニエルも三人の友人も、初めから容姿にも優れ、また知性にも優れており、将来、役人になるための訓練として、バビロン人の教育の洗礼を受けました。ところが彼らは、王の食べる肉を食べることを拒み、試みを受けました。神は彼らを助け、野菜だけ食べても、健康体を保たせてくださいました。そしてこう書いてあります。「神はこの四人の少年に、知識と、あらゆる文学を理解する力と、知恵を授けられた。ダニエルは、すべての幻と夢を解くことができた。（1:17）」神が、彼らに文学を悟る力と知恵を与えられました。それだけではなく、幻と夢という霊の領域においても能力を与えてくださいました。それで、「王は、知恵と悟りに関わる事柄を彼らに尋ねたが、彼らがそのすべてにおいて、国中のどんな呪法師、呪文師よりも十倍もまさっていることが明らかになった。（20 節）」とあります。

そしてこれからのダニエルの働きを見ていると、他の呪法師には決して解き明かすことのできない夢を解き明かし、それが神から来たものであることを証言しました。それでネブカドネツァルは、自分の上に確かに天の神がおられることを最後に認めたのです。したがって、もともと備わっている能力を教会で発揮するのではなくて、主の証しを立てるためには御霊に満たされる必要があるのだ、ということです。主から与えられた知恵と知識があります。

そして次に、神の恵みによって与えられた賜物であるということです。「ロマ 12:3-8 私は、自分に与えられた恵みによって、あなたがた一人ひとりに言います。思うべき限度を超えて思い上がって

はいけません。むしろ、神が各自に分け与えてくださった信仰の量りに応じて、慎み深く考えなさい。一つのからだには多くの器官があり、しかも、すべての器官が同じ働きをしてはいないように、大勢いる私たちも、キリストにあって一つのからだであり、一人ひとりは互いに器官なのです。私たちは、与えられた恵みにしたがって、異なる賜物を持っているので、それが預言であれば、その信仰に応じて預言し、奉仕であれば奉仕し、教える人であれば教え、勧めをする人であれば勧め、分け与える人は惜しまずに分け与え、指導する人は熱心に指導し、慈善を行う人は喜んでそれを行いなさい。」

主が恵みによって、私たちを救ってくださいました。そして私たちはイエス・キリストを信じる信仰によって救われました。パウロはこれを、「神が各自に分け与えてくださった信仰の量り」と呼んでいます。私たちが信じていること自体さえも、主が恵みによって与えてくださったものであり、それは一人ひとり、それぞれの信仰があるということです。もちろん信仰の内容は、イエス・キリストということには変わりませんが、その度合いは変わってきます。そしてパウロは、「与えられた恵み」と言っています。私たちがこれまで行ってきたことを、その能力をもって披露することではなく、主との愛の関係の中で、その育まれている信仰の中で奉仕をするのです。

どのようにすれば、私たちは恵みによることであると判別することができるでしょうか？一つは、「自分が行っていることではない」という確信を持てるかどうかです。もちろん自分の手を動かしています。けれども、自分を通して行われていることが、どう考えても主が与えてくださったものでしかない、という感覚です。ゆえに、「自分を誇らない」という特徴があります。私たちの誇りは、信仰の原理によって取り除かれたとパウロは言っています（ローマ 3:27）。自分が行ったことではないと自覚しているので、「私は、言いつけられたことだけを行っただけです。」という告白をします（ルカ 17:9-10）。

そして御霊の賜物は、<u>御霊が主権を持って与えている</u>ということが特徴です。コリント人への手紙第一 12 章を開いてください。8 節から読みます。「12:8-12 ある人には御霊を通して知恵のことばが、ある人には同じ御霊によって知識のことばが与えられています。ある人には同じ御霊によって信仰、ある人には同一の御霊によって癒やしの賜物、ある人には奇跡を行う力、ある人には預言、ある人には霊を見分ける力、ある人には種々の異言、ある人には異言を解き明かす力が与えられています。同じ一つの御霊がこれらすべてのことをなさるのであり、御霊は、みこころのままに、一人ひとりそれぞれに賜物を分け与えてくださるのです。ちょうど、からだが一つでも、多くの部分があり、からだの部分が多くても、一つのからだであるように、キリストもそれと同様です。」

ここの最後の、「みこころのままに、一人ひとりそれぞれに賜物」と書いてあるところが鍵です。この方は、ご自分の思われるままに賜物を分け与える主権を持っておられます。私たちはそれに、とやかく言うことはできません。そのため私たちは、ある賜物が与えられるかもしれないし、与えら

れないかもしれないし、分からないということを知る必要があります。もちろんすべての御霊の賜物を求めるべきです。すべてが良い賜物です。けれども、すべての人がすべての賜物を受け取るのではありません。それぞれが、互いに異なる賜物が与えられています。ですから、劣等感を持ったり、比較したりするのは、誤っています。

そして御霊の賜物は、あくまでも他者に対して用いるものです。今読んだ第一コリントにこうあります。「12:7 皆の益となるために、一人ひとりに御霊の現れが与えられているのです。」皆の益となるため、です。それからペテロ第一 4 章 10 節には、「それぞれが賜物を受けているのですから、神の様々な恵みの良い管理者として、その賜物を用いて互いに仕え合いなさい。」とあります。つまり、私たちに御霊が与えられる賜物は、あくまでの教会のためであり、他の人々のためなのです。私たちが単に自己啓発のように、能力を発揮することを考えるのなら、教会においてはことごとく失敗します。ですから、私たちが「私の賜物は何であろう。」と悩んでいるときに、まず、「私の心に、教会の人々への憐れみはあるだろうか？」と尋ねてください。主が与えておられる重荷や強い思いであれば、必ずやそれに対して神が何らかの賜物を与えてくださいます。

そして私たちがただ礼拝に参加するだけで留まっていたとしたら、それはちょうど映画館で鑑賞しているのと変わりません。映画館の鑑賞ではなく、演劇の役者なのです。自分自身が礼拝の中に関わっているのです。そのためには、具体的に他の人々に仕える奉仕を見つける必要があります。賜物を用いるのです。

そして今晩の本文では、具体的に手を動かし、物事に取り掛かる賜物が用いられていますが、モーセのように語る賜物もありますね。御霊の賜物は主に二つの種類に分かれます。先に読んだローマ 12 章もそうですし、ペテロ第一には、こうあります。「4:11 語るのであれば、神のことばにふさわしく語り、奉仕するのであれば、神が備えてくださる力によって、ふさわしく奉仕しなさい。すべてにおいて、イエス・キリストを通して神があがめられるためです。」語る賜物と、奉仕する賜物です。預言の言葉をもって慰めと励ましを与える賜物もあれば、具体的に体を動かして奉仕する賜物があります。

本文 1 節では、「聖所の奉仕のあらゆる仕事をする知恵と英知を【主】に授けられた」と、知恵が主に属していることを話しています。聖書が語る知恵は、いわゆる私たちが考える知恵ではありません。それよりまず、知恵と知識の違いを考えてみましょう。知識は、細長く、地を這って、しゅるしゅると音を立てながら動いている動物を、「蛇」であると教えます。知恵は、「毒をもっているかもしれないから、逃げなさい。」と教えます。知恵のない知識は非常に危険です。それはあたかも、テロリストの手に核兵器が渡るようなものです。

そして、知恵は聖書では、神との関係そのものに関わっています。箴言を読むとそれがよく分か

ります。箴言 9 章 10 節には、「【主】を恐れることは知恵の初め、聖なる方を知ることは悟ることである。」とあります。主を恐れるという、人格的な関係そのものに知恵が宿っているのです。コロサイ書 2 章 3 節に、「このキリストのうちに、知恵と知識の宝がすべて隠されています。」とあります。したがって、私たちはキリストご自身を知ることそのものが知恵であることが分かります。

そして 2 節には、「その仕事をするために進み出ようと、心を動かされた者」とあります。御霊の賜物には、感動があります。自ら奮い立って行いたいという願いがあります。ローマ 12 章 11 節には、「勤勉で怠らず、霊に燃え、主に仕えなさい。」とあります。テモテ第二 1 章 6-7 節には、賜物を燃え立たせなさいという命令があります。「Ⅱテモ 1:6-7 そういうわけで、私はあなたに思い起こしてほしいのです。私の按手によってあなたのうちに与えられた神の賜物を、再び燃え立たせてください。神は私たちに、臆病の霊ではなく、力と愛と慎みの霊を与えてくださいました。」

2B 有り余る奉納物 3－7

そして次に、非常に興味深い話が出てきます。云わば、人々が献金するのをやめさせる、という現象です。

3 彼らは、 聖所を造る奉仕の仕事のためにイスラエルの子らが持って来たすべての奉納物を、
モーセから受け取った。しかしイスラエルの子らは、 なおも朝ごとに、進んで献げるものを彼のと
ころに持って来た。4 そこで、聖所のすべての仕事をしていた知恵のある者はみな、それぞれ自
分がしていた仕事から離れてやって来て、5 モーセに告げて言った。「民は何度も持って来ます。
【主】がせよと命じられた仕事のためには、あり余るほどのことです。」6 それでモーセは命じて、
宿営中に告げ知らせた。「男も女も、聖所の奉納物のためにこれ以上の仕事を行わないように。」
こうして民は持って来るのをやめた。7 手持ちの材料は、すべての仕事をするのに十分であり、あ
り余るほどであった。

彼らのために奉納物を携えてきたイスラエルの人々がたくさんいました。彼らが奉仕をすることができるように、モーセを通して神が与えられた命令に従順に従い、しかも喜んで従いました。それによって彼らが、あり余るほどの材料を受け取ったのです。このように御霊の働くところには、従順な心があります。進んでささげる人々の心があります。いやいやながらではなく、主の命令を喜んで従いたいと願っています。そして、一部の者たちだけでなく、各人が献げたいと願います。

2A 幕と板 36:8－38

そしてこれから、幕屋を作っていく奉仕の姿を見ることができます。

1B 幕 8－19

8 仕事に携わっている者のうち、心に知恵ある者はみな、 幕屋を十枚の幕で造った。幕は、撚り

糸で織った亜麻布、 青、 紫、 緋色の撚り糸を用い、意匠を凝らしてケルビムを織り出した。9 幕の長さはそれぞれ二十八キュビト、幕の幅はそれぞれ四キュビト、幕はみな同じ寸法とした。10 五枚の幕を互いにつなぎ合わせ、もう五枚の幕も互いにつなぎ合わせた。11 つなぎ合わせたものの端にある幕の縁に、青いひもの輪を付け、もう一つのつなぎ合わせたものの端にある幕の縁にも、そのようにした。12 その一枚の幕に五十個の輪を付け、もう一つのつなぎ合わせた幕の端にも五十個の輪を付け、その輪を互いに向かい合わせにした。13 金の留め金を五十個作り、その留め金で幕を互いにつなぎ合わせ、こうして一つの幕屋にした。

幕屋と言われる所以でもある「幕」の作成です。

14 また、幕屋の上に掛ける天幕のために、やぎの毛の幕を作った。その幕を十一枚作った。15 幕の長さはそれぞれ三十キュビト、幕の幅はそれぞれ四キュビト、その十一枚の幕は同じ寸法とした。16 そのうち五枚の幕を一つに、 もう六枚の幕も一つにつなぎ合わせ、17 つなぎ合わせたものの端にある幕の縁には五十個の輪を付け、もう一つのつなぎ合わせた幕の縁にも五十個の輪を付けた。18 青銅の留め金を五十個作り、天幕をつなぎ合わせて一つにした。

幕の上にさらにやぎの毛の幕を掛けます。

19 天幕のために、赤くなめした雄羊の皮で覆いを作り、さらに、その上に掛ける覆いをじゅごんの皮で作った。

幕とやぎの毛の幕、そしてさらに上に掛けるのがこの二つです。

これらはすべて、私たちが学んだものです。主がシナイ山でモーセにはっきりと教えられた事柄であり、ほぼ反復されています。けれども主は、あえて彼らの奉仕をこのように一つ一つ書き記すようにモーセを導かれたのだと考えられます。8 節に「心に知恵のある者はみな」とありました。これは英語ですと”every”となっており、ヘブル語でも単数になっています。つまり、「一人ひとりがすべて」という意味であり、主がそれぞれの働きを認めてくださっているということです。イエス様が、このような手の働きは父なる神が認めておられることを教えられました。「6:3-4 あなたが施しをするときは、右の手がしていることを左の手に知られないようにしなさい。あなたの施しが、隠れたところにあるようにするためです。そうすれば、隠れたところで見ておられるあなたの父が、あなたに報いてくださいます。」

2B 板 20－34

20 さらに幕屋のために、アカシヤ材で、まっすぐに立てる板を作った。

幕の次は、聖所の骨格となる板の作成です。

21 一枚の板は、長さ十キュビト、板一枚の幅は一キュビト半。22 板一枚ごとに、はめ込みのほぞを二つ作り、幕屋のすべての板にそのようにした。23 こうして幕屋のために板を作った。南側に二十枚。24 その二十枚の板の下に銀の台座を四十個作った。一枚の板の下に、 二つのほぞのために二個の台座、ほかの板の下にも、二つのほぞのために二個の台座を作った。25 幕屋のもう一つの側、北側に板二十枚。26 銀の台座四十個。すなわち、一枚の板の下に二個の台座。次の板の下にも二個の台座。27 幕屋のうしろ、西側に板六枚を作った。28 幕屋のうしろの両隅に板二枚を作った。29 これらは底部では別々であるが、上部では、一つの環のところで一つに合わさるようにした。二枚とも、そのように作った。これらが両隅である。30 板は八枚、その銀の台座は十六個。すなわち、一枚の板の下に二個ずつの台座があった。

形は一対二の長方形です。それぞれの板の下に二つの銀の台座をはめて、それで板を固定させます。

31 また、アカシヤ材で横木を作った。すなわち、幕屋の一方の側の板のために五本、32 幕屋のもう一方の側の板のために横木五本、幕屋のうしろ、西側の板のために横木を五本作った。33 それから、板の中間を端から端まで通る中央横木を作った。34 板には金をかぶせ、横木を通す環を金で作った。横木にも金をかぶせた。

板を壁のように一つにまとめ、支えるために、横木を使います。

3B 垂れ幕 35－37

35 また、青、 紫、 緋色の撚り糸、それに撚り糸で織った亜麻布を用いて、垂れ幕を作った。これに意匠を凝らしてケルビムを織り出した。36 その垂れ幕のために、金をかぶせたアカシヤ材の四本の柱を作った。それらの鉤は金であった。また、柱のために四つの銀の台座を鋳造した。37 天幕の入り口のために、青、紫、緋色の撚り糸、それに撚り糸で織った亜麻布を用い、刺?を施して垂れ幕を作った。

二つの幕を作りました。一つは垂れ幕で、聖所と至聖所を仕切るものです。そしてもう一つは聖所の入口の幕です。それぞれに柱があり、そこに幕を掛けるようにします。

3A 祭具 37

これで聖所の大枠が作られましたが、聖所の中にある用具が 37 章には書かれています。これは、ベツァルエルが携わります。

1B　箱と蓋　1－9

1 ベツァルエルは、アカシヤ材で、長さ二キュビト半、幅一キュビト半、高さ一キュビト半の箱を作り、2 その内側と外側に純金をかぶせ、その周りに金の飾り縁を作った。3 箱のために金の環を四つ鋳造し、その四隅の基部に取り付けた。一方の側に二つの環を、もう一方の側にもう二つの環を取り付けた。4 また、アカシヤ材で棒を作り、それに金をかぶせ、5 箱を担ぐために、その棒を箱の両側の環に通した。

至聖所の唯一の用具であり、幕屋全体のもっとも中心である契約の箱です。

6 さらに、純金で「宥めの蓋」を作った。その長さは二キュビト半、幅は一キュビト半。7 また、二つの金のケルビムを作った。槌で打って、「宥めの蓋」の両端に作った。8 一つを一方の端に、もう一つを他方の端に作った。「宥めの蓋」の一部として、ケルビムをその両端に作った。9 ケルビムは両翼を上の方に広げ、その翼で「宥めの蓋」をおおっていた。互いに向かい合って、ケルビムの顔が「宥めの蓋」の方を向いていた。

契約の箱の上に置く、宥めの蓋です。これは純金であり、かつケルビムを彫らなければいけなかったので、相当、技能を要する作業だったことでしょう。

2B　臨在の机　10－16

10 彼はアカシヤ材で机を作った。その長さは二キュビト、幅は一キュビト、高さは一キュビト半であった。11 これに純金をかぶせ、その周りに金の飾り縁を作った。12 その周りに一手幅の枠を作り、その枠の周りに金の飾り縁を作った。13 その机のために金の環を四つ鋳造し、四本の脚のところの四隅にその環を取り付けた。14 その環は枠の脇に付け、机を担ぐ棒を入れるところとした。15 アカシヤ材で机を担ぐための棒を作り、 これに金をかぶせた。16 また、机の上の備品、すなわち、注ぎのささげ物を注ぐための皿、ひしゃく、水差し、瓶を純金で作った。

契約の箱と宥めの蓋の次は、臨在のパンの机を作りました。聖所の中に置くものです。

3B　燭台　17－24

17 また彼は燭台を純金で作った。その燭台は槌で打って作った。それには、台座と支柱と、がくと節と花弁があった。18 六本の枝がその脇の部分から、すなわち燭台の三本の枝が一方の脇から、燭台のもう三本の枝がもう一方の脇から出ていた。19 一方の枝には、アーモンドの花の形をした、節と花弁のある三つのがくが、また、もう一方の枝にも、アーモンドの花の形をした、節と花弁のある三つのがくが付いていた。燭台から出る六本の枝はみな、そのようであった。20 燭台そのものには、アーモンドの花の形をした、節と花弁のある四つのがくが付いていた。21 それから出る一対の枝の下に一つの節、それから出る次の一対の枝の下に一つの節、それから出るそ

の次の一対の枝の下に一つの節。このように六本の枝が燭台から出ていた。22 それらの節と枝は燭台と一体で、その全体は一つの純金を打って作られていた。23 また、ともしび皿を七つ作った。その芯切りばさみも芯取り皿も純金であった。24 純金一タラントで、燭台とそのすべての器具を作った。

形はちょうど、アーモンドの木を形にしており、一本の支柱からそれぞれ三本の枝が生え出ている形になっています。そして七本の枝の上に、ともしび皿があります。そして。ここですごいのは純金の重さです。一タラントすなわち34キロです。

4B 香壇 25－29

25 彼はアカシヤ材で香の祭壇を作った。長さ一キュビト、幅一キュビトの正方形で、高さは二キュビトであった。祭壇から角が出ているようにした。26 祭壇の上面と、側面のすべて、および角には純金をかぶせ、また、その周りには金の飾り縁を作った。27 また、その祭壇のために二つの金の環を作った。その飾り縁の下の両側に、相対するように作り、そこに祭壇を担ぐ棒を通した。28 その棒をアカシヤ材で作り、それに金をかぶせた。

香壇です。ここで大祭司が日ごとに香をたきます。これは聖所と至聖所の仕切りになっている垂れ幕の手前に置くものです。

29 ベツァルエルはまた、調香の技法を凝らして、聖なる注ぎの油と純粋な香り高い香を作った。

ベツァルエルは、用具の作成のみならず、香油の調合という難しい作業も行いました。これは聖所の用具全体、また祭司たち本人に注ぎかけるものです。また香そのものを作っています。それは、香壇で主の前に香の煙を立たせるためです。

非常に細かい作業を、ベツァルエルがこなしました。そして、オホリアブが心に知恵のある人々を教えて、幕や板を造らせました。すべて主が、モーセに造りなさいとシナイ山の上で命じられたとおりです。25 章以降に書いてあります。この一つ一つと造っていった、その忠実さと従順が大事です。自分のものを付け足さず、またそれ以下にもせず、主の言われたとおりにしたということです。そこに、神の栄光が現れます。